

会告 「京奈和自動車道の平城宮跡地下通過計画の撤回を求める 要望書」について

現在、京都と和歌山を結ぶ京奈和自動車道の奈良県北部分（大和北道路）路線決定に向けて、建設省近畿地方建設局による調査が行なわれている。路線の候補の中には平城宮跡の地下をトンネルで通過する案が含まれ、この検討のために一九九七年度以来平城宮跡周辺でボーリング調査が進められていたが、一九九九年一二月には平城宮跡内にもボーリングが打ち込まれた。

この計画が実行されると、地下水脈が分断され、地下水位が低下したり地盤沈下が引き起こされる危険が予測される。これは平城宮京跡に埋蔵されている木簡の保存にとっては致命的なことである。

木簡の研究とともにその保存にも努めることを目指す木簡学会としては、この事態を看過することはできない。本来は総会決議の形で道路計画の撤回を求めるべきところであるが、事態の緊急性にかんがみ、委員会決議の形で下記の要望書を二〇〇〇年六月九日付けで採択し、建設大臣・文部大臣・文化庁長官・建設省近畿地方建設局長・同奈良国道工事事務所長宛に送付した。また、関係諸学会へも要望書の写しを送付し、同様の取り組みを行なうよう要請した。

木簡学会としては今後とも事態の推移を注視したいと考える。

京奈和自動車道の平城宮跡地下通過計画の撤回を求める要望書

七一〇年（和銅三）の遷都からまもなく千三百年を迎える世界遺産・特別史跡平城宮跡において、地下にトンネルを掘って京奈和自動車道を通す計画があることが明るみに出た。建設省は、一九九七年以来地質や地下水の状況を調査すると称して、平城宮・京跡においてボーリング調査を実施している。しかし、世界遺産・特別史跡平城宮跡の保存にとって、これはまことに憂慮すべき事態であり、私たちはこの計画に対し強く抗議するとともに、この計画を即時に白紙撤回することを強く要望する。

平城宮跡が現在のような形で保存されるに至ったのには、幕末の北浦定政の先駆的研究以来、明治時代の関野貞や喜田貞吉の研究、そして棚田嘉十郎や溝辺文四郎ら地元の人々の献身的な保存運動の成果によるところが大きい。また、戦後の再三の開発による破壊の危機も、全国的な保存運動の盛り上がりによって乗り越えることができ、最近ではユネスコの世界遺産にも登録され、その価値は世界的に認められるところとなったのである。

平城宮跡の価値は、奈良時代の遺構や遺物が良好に保存されている点にある。中でも当時の生の文字資料である木簡が大量に包蔵されており、これまでに平城宮跡で発見された木簡は、一九六一年（昭和三六）に初めて出土して以来既に五万点にも及ぶ。木簡は史料の少ない奈良時代の歴史の解明の上で重要な役割を果たし、その発見によって奈良時代の歴史が書き変えられることも少

なくない。平城宮跡が世界遺産に登録されたのも、こうした木簡の重要性が世界的に広く認められたからに他ならない。しかしながら、木簡は木片という腐食しやすい素材に書かれており、千三百年もの間、土の中で腐らずに保存されていたのは、豊富な地下水に守られ、日光と空気から遮断されてきたという好条件に恵まれてきたためであった。

従って、平城宮跡の地下にトンネルを掘って京奈和自動車道を通そうという建設省の計画は、平城宮・京跡の遺跡・遺物の保存の上で私たちとしても看過できない。トンネル工事によって地下水脈が断ち切られるようなことがあれば、奈良時代を語る生きた史料である木簡は腐食・乾燥し、その史料としての生命を断たれ、その情報は永遠に失われることになる。ことに平城宮跡ではどこを調査しても木簡が出土するほど、全域にわたり大量の木簡が眠っている。そしてそれが平城宮跡内にとどまらず、平城京跡域でも同様であることは、十二年前に見つかった長屋王家木簡と二条大路木簡計十一万点が何よりも雄弁に物語っている。

大深度地下の工事だから遺跡とは無関係だという議論も成り立たない。大深度まで適度の傾斜をもって下がるためには一キロメートルにも及ぶ距離が必要であり、この間の平城京跡をはじめとする多くの遺跡が破壊されることは明白である。また、トンネルの排気筒設置による遺跡破壊や大気汚染の文化財への影響も無視しがたい。そもそも遺跡は土に刻まれた人間の活動の痕跡であり、その痕跡の刻まれた地盤、すなわち地下も遺跡そのものなの

であって、トンネル工事は遺跡自体の存立に関わると考えられる。建設省はボーリング調査によって平城宮跡の地下の状況を継続的に調査するとしているが、ボーリング調査には限度があり、木簡を守る複雑な地下水脈の全貌がわかるとは考え難い。トンネル工事が地下水脈を切る可能性があるのは、例えば最近の第二阪奈道路の阪奈トンネルや近鉄線の新生駒トンネルの工事によっても明らかであり、そのような危険が少しでもある以上、遺跡・遺物の保存を考えるならばトンネル工事の実施は避けるのが賢明である。

先人のためまぬ努力によって保存され、世界遺産にも登録される価値が世界的にも評価されたばかりの平城宮跡の地下にトンネルを通すという発想自体が疑問であり、もし地下トンネル工事によってこのかけがえのない遺跡を破壊するならば、後世に大きな汚点を残すことになる。それはこれまでの国民的な保存運動の成果をないがしろにするものであるのみならず、地球規模の人類に対する挑戦といっても過言ではない。

私たちは、これまでの平城宮跡保存の経緯を無視した、京奈和自動車道の平城宮・京跡地下トンネル計画に厳重に抗議するとともに、将来に悔いを残すことのないようその白紙撤回を強く要望するものである。そしてかけがえのない人類の遺産平城宮・京跡が永遠に保存され、奈良時代の歴史の舞台として、広く世界の人々に愛され活用されていくことを心から願うものである。

二〇〇〇年六月九日

木簡学会委員会